岩手大学の仮名

どうしても、とのことで昨年度に続きこの小稿を依頼されました。そこで岩手大学での仮名の学書を紹介し、書教育に関する私見を述べてみます。学生諸氏の４年間の成長に思いを巡らせていただき、本作品集をより楽しんでいただく一助となれば幸いです。

岩手大学の仮名では、１年次で古筆臨書の方法を学び、２年次で臨書から幅広く確かな技量を磨きつつ倣書の方法も学び、３年次で臨書と倣書を往来し、４年次で倣書から創作への手がかりを掴むという過程で学書を進めています。科展・卒展の課題作品は、１年で臨書、２年で臨書20首と倣書10首を交ぜ合わせて散らし書きした30首、３年で倣書30首、４年の卒業制作で創作50首です。４年間をかけて各自の計画の元に任意の古筆を順次幅広く選択して学習することで、夫々の書風を自ら形成していきます。集大成の卒業制作では、例えば基調とする古筆を据えた上に他の古筆も適宜取り込むなどの方法で、これまで各自が学んできた様々な古筆が止揚されることを目指しました。この臨書、倣書、創作という循環は温故知新の過程であり、学書を通して伝統や文化の価値と真髄を体感すること、創造性や個性を育むことに繋がってきたと考えています。

書における個性は造形と線質（用筆）の両面に表れる一方で、師の影響もまた自然と現れるものです。大学では私と４年間勉強することから特にそれが大きくなりますので、安易にお手本を教示したり執筆の様子を見せることをせずに、各人の良いところや考え方の例を示すよう務めました（もちろん現存作家から執筆法や書風を学ぶことは大事です。その場合はなるべく様々な先生の書き振りを見て相対的に捉えられることが重要と思います）。

教科や領域の内容それ自体の学習は勿論ですが、同様に大切だとずっと考えてきたことは、教科や領域の学習を通して何を涵養し、何を身につけるのかということです。これはコンピテンシー・ベースとして新学習指導要領でも重要な視点となっています。先の制作過程は、主体性を伸ばすこと、個性を看取して大事に活かすこと、相手意識や他者を尊重する気持ちを涵養し良いグループを形成すること、創造性や文化観を養うことが企図されてきました。学生たちはいつも相互に良いところを学びあい高めあいながら、皆さん立派に素晴らしい成長をされました。

主体性や個性は、芸術の表現活動が本来内包する性質です。また制作の過程や成果を発表し、各人の表現について互評し共有することも芸術活動に含まれるものです。これらを制作過程で意識的に生かせるよう柔軟にプログラムすることは、近年推奨されるアクティブラーニングや課題解決学習が企図するモデルと合致します。Ａ－の進展が確実な将来において、書や芸術教育が人間文化にとって如何に重要であり得るのかを、皆さんと考えていきたいと思います。

平田 光彦